障がい者がキラリと光ってほしい
標津町らしい作業所をつくろう

市町村名：標津町
町 人 口：人口　5,717 人（H23.4.1 現在）
地域概況：　標津町は、北方領土国後島の眼前にあり、漁業（鮭定置網漁とホタテ漁業）と農業（酪農）を主産業とする町。標津（シベ・ツ）とは、アイヌ語で「シベ・オツ（サケのいるところ）」を意味している。

１　取組のきっかけ・経過

平成 18 年 10 月、障害者自立支援法の施行に合わせ、共同作業所キラリ工房を立ち上げた。その 3 ヶ月前は･･･、ニーズはどこにあるのか。町内で障害をもった方々はどこでどんな生活をしているのか。何をどうしていいのか、作業所を町につくることは雲をつかむようだった。

町内には、小学校教員時代に特別教育を長年担当し、退職していた先生がいた。先生の教員時代の教え子は、今、どこで何をやっているのかを尋ねた。また、町内には『標津町手をつなぐ親の会』があった。「共同作業所を作りたい。作ってほしい。」が大きな目的で、リサイクル品を売ったりして、将来のために蓄財していた。

まず、会員に集まっていただき、会員の子どもたちは、どこで、どんな生活をしているのか。会員に聞いた。町内に日中活動の場がないので、多くの子どもたちは町外の福祉施設に入所していた。

親は親元の近くに子どもたちを置いておきたいのが当然の心情。共同作業所を立ち上げなければならなかった。役場の福祉課職員２名が動き始めたのは７月から。立ち上げまでは３ヶ月、髪の毛が逆立つほどバタバタしていた。

「誰が指導するの」「どんな作業をやるの」「昼食はどうするの」。親御さんの質問に満足に答えることができなかった。走りながら考える風では、親御さんに不安感を与えるだけだった。それでもやるしかないと思った。

共同作業所設置検討発起人会を開いたのが９月２２日。作業所の名称が、「きずな」「キラリ工房」の二つに分かれた。地元に「町民まつり水・キラリ」という祭りがある。それをとって「キラリ工房」とした。

活動の拠点は、以前、地元のスーパーだった。賃料を払って貸してもらうこととなった。事務机、作業机、応接セット、棚、茶箪笥、魚加工台などは、廃校の備品であったり、地元スーパー・金融機関などからも譲り受けた。皆さん協力的だった。コピー機、電話、パソコンなどは、運営費補助とともに町役場からの補助金で購入した。

初代の所長は、小学校教員時代に特別教育の経験を多く積んでいた今泉先生を、そして、指導員には役場を退職していた斉藤さんにお願いし、２人体制で進めることとした。

２　事業（活動）内容

当時、共同作業所といえば、クッキーづくり、古新聞等の回収、フリーマーケット、ウエスづくりなどが三種の神器。しかしながら、これらは全然金にならないのでやりたくなかった。標津町の特徴を生かし、最初は少々時間がかかっても販売先が安定し、少しでも収入を得ることを考えたかった。

標津町には前浜がある。コマイ、チカ、ホタテの加工から始めた。斉藤指導員は、浜の母さんから塩加減を学んだ。ふり塩のコマイやチカを一晩漬け込み、翌朝、さっと水あらいして天日干しにした。

いい味となった。指導員は研究熱心だ。ホタテのミミや卵巣の加工、カレイ干し、サケ皮チップなどなんでもやった。地元での販売は限界があるので、人のツテで札幌や東京の居酒屋を紹介してもらった。価格もそこそこなので評判がいい。

干物づくりは夏場にはできないので、翌年、町有地に地元企業の協力でビニールハウスを設置してもらい、ボランティアの支援により、トマト、キュウリ、ナスなどをつくりはじめた。

行政の支援もあった。標津町にはサーモンパークがあり、建物の内外のトイレ清掃業務を受けることとなった。月・水・金の週３回、開館前に行う清掃は、間違いなく入ってくる収入である。

「とれたての野菜だよ～。美味しいよ～。トマトはこんなに身がしまっているよ～。いかがですか」

← とれたて野菜を販売するキラリ工房通所者

標津町前浜でとれたコマイやチカを天日干しする通所者 →

３　成果・効果

共同作業所キラリ工房を立ち上げて５年目。通所者は、下は、この春に養護学校を卒業した人から４０歳近くになる人まで７名が通っている。日中、通うところがなかった通所者は、通い始めてから明るくなったとの声も聞く。町内外のイベントにも参加し、社交性も出てきた。吃音がちだった人がかなりしゃべられるようにもなってきた。

キラリ工房は多くの町民の皆さんに支えられている。農産物や魚加工品を買っていただくことはもとより、賛助会員として多くの寄付をいただいている。一般就労のための見習いとして受け入れてくれた会社も出てきた。工房を支えてくれるボランティアさんも少しずつ増えてきた。

売り上げも少しずつ伸びてはきたが、通所者１人あたり、年間１５万程度の賃金にしかなってい

ない。この金額は決して多いとは言えない。通所者は、他に生活保護費や障害者年金を受給していたり、親元から通っているのでなんとか生活はできる状態にはある。

４　課題・これから

障害をもった方が、標津町を終の棲家とするためには、多くの課題がある。それは、

①共同作業所キラリ工房の経営を安定化させること。

現在、工房をNPO法人化し、その後、就労支援B型事業所の認可を得るための作業を開始し始めた。このことにより、障害福祉サービス報酬を得ることができるようになり、職員の給与を上げることができるようになる。また、障害者福祉施設等で経験した職員を採用できる可能性がある。

②障害者の生活の場を確保し、生活を支援する指導員を確保すること

キラリ工房に通う方は、地元に親や親戚がいるが、その方々がなくなると、一人で生活しなければならない。障害者のケアホーム、グループホームが必要であるし、自立した生活をするためには、普段の生活の指導援助も必要となる。

問合せ先：標津町南５条西２丁目２番地４　共同作業所キラリ工房（0153-82-1323）